

州を中心に様々だ。久々の授業始めは学生間の情報交換に使われた。大手IT企業のCSR(企業の社会的責任)部門で働く30代英国人女性は自分の役割を考えるため参加している。大手システム会社勤務の50代男性は、地域と融合したビジネスモデルを模索していた。各自の状況を語り合う交流の場に伊藤も参加し、盛んに情報を集めた。そんなふうにしてあつという間に時間が過ぎていった。

午後行われたMBA最初の講義は経済学だ。学生は約20人。試験直前ということもあり、教授の言葉を一言も聞き漏らすまいと教室の空気は張り詰めている。

講義がEU(欧州連合)の話に及ぶとEU諸国の学生が手を挙げ、自国の例を紹介する。ロシアのインフレの話になると、ロシア人学生が実例を話す。講義だけでなく学生の生きた情報も授業を構成していく。英語はとにかく速い。発音に癖がある場合もあり、聞き逃すと議論から遅れる。伊藤は耳を澄ませるしかなかった。

授業後、伊藤は教室前のラウンジでMBA学生と話した。英国の男性エンジニアや自国の金融機関に勤めていたノルウェー人、小売業経験者のインド

人女性など経験は多彩だ。学生間にはどこことなく競争心が感じられ、伊藤がゲストであるからといって、特別優しくしてくれるわけではなかった。

伊藤に感想を聞くと「興味のある内容なのでつらくない」とのこと。だが、表情は不安でいっぱいに見えた。

**英語が速い。訛りもある
慣れるには時間が必要だ**

2日目、伊藤は午前3時から授業の資料を読み込んだ。この日は終日、MSCに参加する。まずSustainable Development(持続可能な開発)についての講演だ。カナダで過剰にタラを捕獲した歴史的事件が紹介された。政治家が捕獲を抑制し、数多くの漁師が転職を余儀なくされたという内容だ。家族が漁師や魚屋だったという講師自身にとって、大変身近な事件で、今、彼は持続可能な開発を進めるためのNPOに在籍している。

そして「組織を長期的に運営するにはどんな工夫ができるか」という内容の全体討論が始まった。その後、外部のNPOリーダーによる、NPO運営についてのパネル討論が行われた。

伊藤はグループ討議では話せるが、全体討議ではまだ発言できていない。

障壁は英語だった。

3日目の朝はMBAのマーケティング授業だ。テーマは商品の価格の決め方だ。資料として前日に配られていた「ハーバード・ビジネス・レビュー」の記事を基にグループワークが始まった。建設工事用クレーンに使う部品で改良型の商品を開発した会社の立場になって、新商品の価格を決める。

伊藤はアジア系3人、英国人2人のグループに入った。だが伊藤が記事を渡されたのは授業の直前。A4の用紙で16ページもの記事を読んで議論に加わるのは酷だった。学生はすぐさま議論を始めた。

学生1「市場シェアは何%狙う?」

学生2「60%くらいだよね」

学生3「クレーンを1台作るには部品は何個必要になるかな」



伊藤 麻衣子

Maiko Ito

1974年5月愛知県生まれ、29歳。静岡県立大学卒業。在学中、英国ニューカッスル大学に1年間留学。環境問題に興味があり、地熱発電事業を始めた大手ITシステム会社に入社。配属されたのはIT部品海外営業の窓口。海外への異動希望も「女性だから」とかなえられず、4年目に退職。知人の起業に参加したが失敗。それまでのエリート意識が吹っ飛んだ。失業を経験した1カ月後、NPO「ETIC」のスタッフになり、若者支援に励む。



マーケティング授業の
グループワークで協力する
MBA学生